



# 犬と猫の ライフステージと 栄養について ～高齢期～

湘南獣医師会 塩谷 香織

犬と猫の一生は、ヒトに比べ4〜7倍のスปีドで進みます。そして他の動物と同様に、妊娠期、授乳期、成長期、維持期、高齢期、老齢期と「ライフステージ」が推移します。それに伴い、各ライフステージでの最適な栄養素・種類・量も変化します。今回は犬猫の高齢期・老齢期における栄養について考えてみようと思います。

## 高齢期の定義は？

犬猫には高齢期と老齢期の間に明確な定義はありません。今回は高齢期・老齢期を合わせ「高齢期」と致します。

猫・小型犬・中型犬では8〜11歳、大型犬では8歳程度がヒトの60歳と考えられています。ヒトが60歳程度から高齢に差し掛かるように、犬猫でもこの年齢あたりから老化に伴う生理的变化が起きてくると思われます。

老化に伴う生理的变化としては、

- **被毛**：皮膚の柔軟性を欠く、毛に白髪が混じる
- **消化器**：消化率・代謝率の低下、消化管運動の低下(便秘)
- **泌尿器**：腎機能の低

下(腎臓病は死亡原因の上位)

- **筋骨格系**：筋肉量の低下、関節炎の増加(肥満はさらに炎症を促進させる)
- **循環器**：老犬・老猫の30%に心疾患が認められる
- **感覚器**：視覚・聴覚・味覚の低下、脳の加齢による認知障害
- **順応性**：環境変化に対する適応力の低下(引越など)

## 栄養管理の注意点

これらの変化が起き始める高齢期の犬猫に対する栄養管理の注意点としては、

- **老化に伴って起こる運動量の低下と基礎代謝の低下を考慮し、維持期(1歳〜高齢期まで)よりもエネルギー摂取量20〜30%減を目安とする。**ただし、体重が適正に維持できる量で調整する。
- **エネルギー要求量が減り、脂質代謝能も衰えるため、脂肪含有量が低めの食事が適している。**
- **高齢期はアミノ酸(タンパク質を構成する成分)を十分に摂取する必要がありますが、高齢期には腎臓病(\*)に罹患している場合**

もあり、タンパク質制限をどの程度まで行うかはまだ議論の余地がある。

\*腎臓病ではタンパク質制限が必要となる場合がある

● **認知障害の防止**あるいは進行抑制のためには、EPA(エイコサペンタエン酸)やDHA(ドコサヘキサエン酸)を強化した総合栄養食やサプリメントが期待できる。

● **高齢期のビタミン**要量に関しては明確な知見はないが、ほとんどのビタミン要量は維持期より増加している可能性が高い。

● **ミネラル**では、P(リン)の過剰摂取は腎臓へのCa(カルシウム)沈着を促進し、腎機能低下を招くため、避ける必要がある。

現在、これらに考慮した高齢期用のフードが様々なメーカーから販売されています。動物病院では、それぞれの患者さんの状態やライフステージに合わせ栄養学的なアドバイスや給餌指導など行なっています。お家のわんちゃん・ねこちゃんのフードに関するご質問があれば、お近くの動物病院にご相談ください。

(かまくら犬と猫の病院)